

竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介

—— 和歌を主題とする組香（十四） ——

本稿は、『資料』竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介——和歌を主題とする組香（一）——（『社会科学』第46巻第3号、二〇一六年一月）、（『社会科学』第46巻第4号、二〇一七年二月）、（『社会科学』第47巻第1号、二〇一七年五月）、（『社会科学』第47巻第2号、二〇一七年八月）、（『社会科学』第47巻第3号、二〇一七年十一月）、（『社会科学』第47巻第4号、二〇一八年二月）、（『社会科学』第48巻第1号、二〇一八年五月）、（『社会科学』第48巻第2号、二〇一八年八月）、（『社会科学』第48巻第3号、二〇一八年十一月）、（『社会科学』第48巻第4号、二〇一九年二月）、（『社会科学』第49巻第1号、二〇一九年五月）、（『社会科学』第49巻第2号、二〇一九年八月）、（『社会科学』第49巻第3号、二〇一九年十一月）に引き続き、竹幽文庫蔵『香道籬之菊』所載の組香について、とくに和歌を主題とする組香を対象に、翻刻と考察をおこなうものである。本稿では、数の巻から、曲水香、寿浮木香、春日山香の計三つの組香を取り上げる。資料に関わる基本的な説明は、

矢野 環
福田 智子

〔資料〕竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介（『社会科学』第46巻第2号、二〇一六年八月）を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、前掲『社会科学』第46巻第3号に詳述しているので、本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

凡例

一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、「朱」と示し、一面の終わりには、〃〃〃を付して丁数を記す。考察には、（1）竹幽本組香の方法、（2）和歌作品との関わり、というふたつの観点を設ける。

一、（1）の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」（『社会科学』第46巻第3号）を参照されたい。

一、(2)で引用する和歌作品の本文は、特に断らない限り『新編国歌大観』Ver.2(角川書店、二〇〇三年)に拠る。
一、卷末には影印を付す。

《数巻―四》曲水香

【翻刻】

△(朱) 曲水香

曲水の宴は、唐土にては周の世より始り、我朝にては、顕宗帝二年弥生上の巳の日、後苑ゴエンに御幸ありて、文人詩哥の人、東流トウリウの邊にて盃を上より流し、其盞の我前を通らざる中に、詩を作り歌を詠み酒宴をなせし故事を写し侍る香組なり。」数一六ウ

新古今集
から人の船をうかへてあそふてふ今日は我せこ花かつら
せよ

新續古今集
めぐりあふ今日は弥生のみかは水名に流れたる花の盃

草廬集
石まゆく花の盃までしはまたことの葉はかきもなかさ
す」数一七オ

一 一炷開也。

一 詩方五人、歌方五人と分つ詩方上座
たるべし。

詩方札紋座定如左

一座 王維 二座 岑參 三座 靈徹 四座 杜牧 五座 林逋

歌方札紋座定如左

一座 人麿 二座 業平 三座 遍昭 四座 小町 五座 黒主

如此座順に應し札紋違ざる様にすべし。」数一七ウ

一 詩の香、哥の香、各五包充各包に拵へ、
試に出す、盞の香一包試なし拵へて、
拵へて、地香の内一包取除拵は用ゑ、
拵なし、其跡へ盞の香を加へ、都合十包出香とす。

一 盤は横五間豎四筋。其真中に川の流有。左右の端に立物建の穴五つ充有。

一 立物

桃花 五本詩方に
建る 柳 五本歌方に
建る」数一八オ

香包 十 短冊 十 桃の盃 十

王維人形フウイ 岑參人形センサン 靈徹人形 僧形

杜牧人形トボク 林逋人形リンホ 各敷草に居(朱)

人麿人形 業平人形 遍昭人形

小町人形 黒主人形 各円座に居(朱)

一 記録は中り斗を記す。

一 盞の香、何人聞にても朱二点充、銘々持の香聞」数一八ウたるは朱一点也。引次の香聞たるは黒一点也。

但し引次といふは蓋の香、或は持の香を聞中たる香の
其次の出香一炷を引次と号る也。
右の外は点なし。札銘斗を聞たる通認るべし。

銘々持香左のことし。

一番詩の香 王維(朱) 二番詩の香 岑參(朱)

三番詩の香 靈徹(朱) 四番詩の香 杜牧(朱)

五番詩の香 林逋(朱)

一番哥の香 人磨(朱) 二番哥の香 業平(朱)

三番哥の香 遍昭(朱) 教二九オ 四番哥の香 小町(朱)

五番哥の香 黒主(朱)

蓋の香は持の差別なし。

一 人形は座の順の通り前座に向合て並置て前座といふは、
川端の手也、桃花 詩

方柳 歌方 人形の後座に建置き、桃の盃を一つ充人形の前

の川に浮置くへし。香包に名香を一炷充入て香元に置く也。

一 人形進退并に香包短冊は聞の点に随ひ用様有る也。』教二九ウ

点なき間には其沙汰なし。

一 初の点には前座の人形を後座へ直し、其前の盃を取揚て前

座へ置くべし。

一 中の点には香包を其座の人に與ふ。詩歌の内案し置べし詩方は
案べし

歌方は哥を。

一 後の点には短冊を渡すと案置たる詩哥の内を認て前座に盃

と並べ置べし。

一 札数一人前十二枚、拾人分百拾枚也。』教二〇オ

札表

王維 岑參 靈徹 杜牧 林逋 各真文字

人磨 業平 遍昭 小町 黒主 各行文字

札裏

詩 五枚 歌 五枚 蓋 一枚

一 香包折形寸法

行成又は千代紙類を以て四寸五分四方に截て折るべし。』

教二〇ウ

折立形 開

幅一寸五厘 之 〔図〕

長二寸一分五厘 圖

〔図〕 曲水香之記 詩除(朱) 』教二オ

〔表〕 』教二ウ

〔表〕

〔表〕

朱書の通りに香包短冊を渡すべし。

但し香本番付并香包短冊の書込み

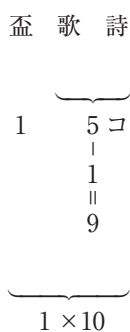
誠の記録には認る事なし。』教三オ

曲水香盤立物之圖

- 〔図〕 数三ウ
- 〔図〕 数三オ
- 〔図〕 数三ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



* 本香には、地香「詩」「歌」の香、各五包と、客香「盃」の香一包の計十一包を用意し、地香から一包を除いた九包に客香一包を加えた計十包を用いる。地香のみ試香を行う。盤物である。連中十人を詩方と歌方に五人ずつ分け、それぞれ一座から五座までの位置を決める。答えには特殊な札を用いる。札紋は、その位置により指定されており、詩方は真文字（楷書体）、歌方は行文字（行書体）で記す。「詩」「歌」各五枚と「盃」一枚の十一枚の札を用意し、一炷開きで香を聞く。

盤は、横五間縦四筋で、中央に川の流れが描かれ、左右の端に立物を立てる穴が五つずつあるものを用いる。詩方には桃花を、歌方には柳を、それぞれ五本ずつ立てる。その他、立物としては、香包、短冊、桃の盃を十ずつと、連中に一体ずつ人形

を十体用意する。香包は、行成紙（さまざまな色に染めた鳥の子紙に雲母で文様を刷った紙）または千代紙を四寸五分の正方形に切って用いる。折り方にも指示がある。また、詩方の人形は、敷革、歌方の人形は円座に座らせる。

人形は、座の順のとおりに前座（盤の川端）に詩方と歌方とを向かい合わせて並べて置く。人形の後座（後方）に、前述の桃花と柳を立てて置き、桃の盃を一つずつ人形の前の川に浮かべて置く。また、香包には名香を一炷ずつ入れ、香元に置いておく。

「盃」の香は、聞き当てる人数に関わらず朱二点であるが、その他の香は、連中銘々の「持の香」が指定されており、それを聞き当てる時と朱一点となる。また、「引次の香」「盃」の香、あるいは「持の香」を聞き当てる直後の一炷を聞き当てる時、黒一点である。

人形の進退や香包・短冊の使い方は、これら聞き当てる点に従う。初めて点を得たときは、前座にあった人形を後座に移し、その前の川に浮かべてあった盃を取って前座に置く。次に点を得ると、香包が与えられると同時に、聞き当てる人は、詩方は詩を、歌方は歌を覚えておく。さらに点を得たときには、短冊が渡され、そこに詩あるいは歌を書いて、前座に置いておいた盃と並べて置く。

記録には、聞き当てた香のみを記す。

(2) 和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている歌は、伝書の集付どおりに、以下の歌集に見出される。

曲水宴をよめる

中納言家持

から人のふねをうかべてあそぶてふけふぞ我がせこ花かづ
らせよ 『新古今和歌集』 卷第二春歌下、一五一番

曲水宴の心を

権中納言家賢

めぐりあふけふはやよひのみかは水名にながれたる花のさ
かづき 『新統古今和歌集』 卷第二春歌下、一七九番

曲水宴を

いしまゆく花のさかづきまてしばしまだ言のははかきもな
がさず 『草庵和歌集』 卷第一春歌上、一一七番

一首目の家持歌は、天平勝宝二年(七五〇)三月の詠として、『万葉集』にも載るところである。

三日に守大伴宿祢家持の館にして宴する歌三首

漢人も筏浮かべて遊ぶといふ今日そ我が背子花縵せよ

『万葉集』 卷第十九、四一五三(四一七七)番

もつとも、『万葉集』では第二句「筏浮かべて」であり、本伝書の直接の出典としては、やはり『新古今集』とすべきであろう。また、二首目は花山院(藤原)家賢の歌、三首目は二条派の歌僧、頓阿の自撰家集の歌であり、いずれも南北朝時代に活躍した歌人の歌が並ぶ。

本組香の主題、曲水宴は、古代中国大陸から伝来した行事である。本伝書では周(紀元前一〇五〇年頃〜二五六年)の時代から始まったと記される。なお、『荊楚歲時記』(六世紀、宗懐撰。杜公瞻注。楚の年中行事を記した書。)の注に載る『続齊諧記』の記述からは、晋の武帝(在位二六五年〜二九〇年)の頃には行われていたことが窺える。日本においては、『日本書紀』の「三月の上巳に、後苑に幸して、曲水宴きこしめす。」(卷第十五・顕宗天皇元年(四八五))が嚆矢とされる。

「歌方」の五人の歌人名は、すべて『古今集』仮名序に登場する。「うたのひじり」とされる柿本人麿のほか、「ちかき世にその名きこえたる人」として挙げられた、いわゆる「六歌仙」(僧正遍昭・在原業平・文屋康秀・喜撰法師・小野小町・大伴黒主)

のうち、業平・遍昭・小町・黒主の四名の歌人名が採られている。

なお、「詩方」の五人については、王維・岑參・靈徹・杜牧は唐代の詩人、林逋は北宋の詩人である。とくに王維は「詩仏」と称され名高い。

《数卷一七》 壽浮木香

【翻刻】

△(朱) 壽浮木香

新勅撰集

延喜六年日本記竟宴菅田天皇

西三条右大臣

年へたるふるさうき、のすてねはそさやけき光り遠く
さこゆる

此和哥によりて組侍たる香也。

一 一炷開也。】数三四ウ

一 十炷香の札を用。

一 麝方五人、龜方五人と分つ。

一 浮木の香、光の香、遠の香、各三包外に一袋焼、試に出す、客香二包一包つ、別香を用ゆ、

以上拵へて、地香九包の内一包取除け、残八包に客香二包

加へ、都合十包出香とす。

一 盤は豎十行溝五筋、横十四界中に勝負の場有勝負客。】数三五オ
立物

金折麝 五羽 付柄を 銀折龜 五疋 座にのせる

紅梅 一本 若松 五本 寒竹 五本

哥の短冊を付る

一 麝龜を双方盤の端に置麝は睡に立る。龜は清に。麝龜同合置へし。勝負場の真中に紅梅を立る。其左右に松竹を立置松は睡に立る。竹は清に立る。くべし。

一 浮木香と聞は一の札、光の香に二の札、遠の香に】数三五ウ

三の札、客香にウの札初に出たるを露と云ふ。つつべし。

一 麝龜の進は、麝方にて麝の香初客、独聞四問、二人よりは三

問、龜香独聞三問、二人よりは二問、龜方にて龜香次客、独聞

四問、二人よりは三問、麝香独聞三問、二人よりは二問、此

外地香の聞は一問充進むべし。勝負場へ行と、麝方は若松

を取るべし。龜方は竹を取べし。麝龜ともに勝負の場へ至

れば働かず。】数三六オ 勝負の場の除にて聞違たるは一問あ

とへしざる。独聞違たる時も一問跡へ退くなり。勝負の場

を行越、麝にても龜にても跡の方へむけ置なり。聞にした

がひ跡の方へす、む。又行越たる時も同前なり。香終りて

後に勝たる方へ紅梅をとるべし。

一 記録は中り斗を記す。一炷聞中たるを百歳と記し、二炷中

たるは二百歳と段々皆中を千歳とするすべし。】数三六ウ

壽浮木香記 浮木除(朱)

〔表〕 数三七オ

壽

浮 紅梅 壹本

金短冊に年経たるの哥を認る

木 若松 五本

金折鶴 五羽

〔図〕

香 寒竹 五本

銀折龜 五疋

盤

〔数三七ウ〕

立

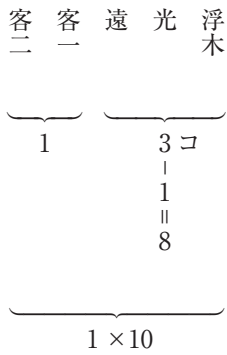
物

之

〔図〕 数三八オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



本香には、地香「浮木」「光」「遠」の香、各三包計九包と、客香二包を別香で用意する。
*そして、地香九包から一包を除き、残

りの八包に客香二包を加えて、計十包を用いる。地香のみ試香^{*}を行う。盤物である。

盤は、豎十行溝五筋、横十四界のものを用いる。中央には「勝負の場」を設け、その畦には穴がひとつずつある。立物には、金の折鶴を柄に付けたものと銀の折龜を台に載せたものを五羽ずつ、歌の短冊を付けた紅梅を一本と、若松・寒竹を五本ずつ用意しておく。

連中は鶴方と亀方に五人ずつ分ける。鶴方は鶴の立物を、亀方は亀の立物を、ひとりひとつずつ所有する。答えには十炷香札を用い、一炷開きで香を聞く。

まず、鶴は畦に、亀は溝に、向かい合わせて盤の端に置き、「勝負の場」の中央に紅梅、その左右の畦には松、溝には竹を立てる。

「浮木」「光」「遠」の香には順に「一」「二」「三」の札を、客香には「ウ」の札を打つ。二種類の客香は、初めに出た香を「鶴」、後に出た香を「亀」と呼ぶ。

連中は、自分の方の香(鶴方は「鶴」、亀方は「亀」)の香を聞き当てると、独り聞きは四問、二人以上では三問進み、また、相手方の香(鶴方は「亀」、亀方は「鶴」)を聞き当てると、独り聞きは三問、二人以上では二問進む。地香を聞き当てたときは、鶴方・亀方の区別や聞き当てた人数に関わらず、一問ずつ

とする。

立物の鶴・亀が「勝負の場」に至ると、鶴方は若松を、亀方は竹を取る。これ以降、香を聞き違えたときは、ひとりだけ聞き違えたとしても、その人数に関わらず一問退く。十炷すべてを聞き終わった後、勝った方が紅梅を取る。

なお、「翻刻」中の□の箇所は、文字の上に薄紙が貼られている。そこには、「勝負の場」に鶴・亀が同時に至ったときは、これ以降、鶴・亀の立物は動かさないということや、「勝負の場」を越えると、鶴でも亀でも立物を後ろに向け直し、香を聞き当てるたびに後ろ向きに進むといったことが記される。「勝負の場を行越……又行越たる時も同前なり。」というように、文意が解しにくく、誤写が想定される箇所もあるが、全体としては特筆すべき内容を含んでおり、注意を要する。あるいは秘伝の類か。

記録には、聞き当てた香名のみを書き、最下段には、聞き当てた数により、一炷から順に「百歳」「二百歳」……「千歳」と記す。

(2) 和歌作品との関わり

冒頭に挙げられている歌は、『新勅撰和歌集』巻第七賀歌、四九〇番に載る。

延喜六年日本紀竟宴歌、誉田天皇 西三条右大臣

年へたるふるきうききをすてねばぞさやけきひかりとほく
きこゆる

『日本紀竟宴和歌』上、三九番にも載る歌である。第二句「ふるきうき、の」は「ふるきうききを」の異文があるが、本伝書の本文が誤りであろう。「浮木」「光」「遠」の香名は、すべてこの和歌に拠る。

「西三条右大臣」は、源光（八四五〜九二三）。仁明天皇の皇子で、『新勅撰集』にこの一首が載る。後の『源氏物語』の主人公、光源氏のモデルのひとりともされる。

「日本紀竟宴（和）歌」は、『日本書紀』の講筵に際し、登場する神や人の名を題にして、その事跡を詠む題詠歌である。当該歌は、延喜六年（九〇六）の詠。歌題の「誉田天皇」は、第十五代応神天皇で、父は仲哀天皇、母は神功皇后である。以下、引用する『日本書紀』応神天皇三十一年八月の記事に依拠して、当該歌は詠まれている（本文の引用は、『新編日本古典文学全集』訓下し文に拠るが、読み仮名を取捨選択したり、読点を付したりするなど、適宜、手を加えた箇所がある）。

三十一年の秋八月に、群卿まへつきみたちに詔して曰はく、「官船みやけのふね、枯野からの

と名くるは、伊豆国の貢れる船なり。是朽ちて用ゐるに堪へず。然れども、久しく官用と為りて、功忘るべからず。何ぞ、其の船の名を絶たずして、後葉に伝ふること得む」とのたまふ。群卿、便ち詔を被りて、有司に令して、其の船の材を取り、薪として塩に焼かしむ。是に、五百籠の塩を得たり。則ち施して周く諸国に賜ひ、因りて船を造らしむ。是を以ちて、諸国、一時に五百船を貢上り、悉に武庫水門に集ふ。是の時に当り、新羅調使共武庫に宿る。爰に新羅の停に、忽に失火き、即ち引びて聚へる船に及び、多に船焚かれぬ。是に由りて、新羅人を貢む。新羅王、聞きて、讐然ち大きに驚きて、乃ち能き匠者を貢る。是、猪名部等が始祖なり。初め枯野の船を塩の薪にして焼さし日に、余燼あり。則ち其の燃えぬことを奇しびて献る。天皇異しびたまひて、琴に作らしめたまふ。其の音鏗鏘に遠く聆ゆ。是の時に、天皇歌して曰はく、

枯野を 塩に焼き 其が余り 琴に作り 掻き弾くや
由良の門の 門中の海石に 振れ立つ なづの木
さやさや
とのたまふ。

応神天皇が、古くなつた官船「枯野」の名を後世に伝えるべく、

この船を薪にして塩を焼き、諸国に賜つたところ、返礼として多くの船が献上された上、薪として燃えなかつた木で作つた琴の音は、清らかに遠く響き渡つたという。当該歌は、この事跡を讃えて詠まれている。

なお、連中を分ける「龜方」の名称は、「浮木」から「盲亀の浮木」の故事を連想したものであろう。寄合書の「浮木」の項にも、「盲亀」(『俳諧類船集』)、「龜」(『連珠合璧集』)が挙げられている。「露方」は、「龜」の対として発想されたと思われる。本組香の名称「壽浮木香」の「壽」の意は、この「露」「龜」の名に象徴的に表れている。

《数巻一九》春日山香

【翻刻】

△(朱)春日山香

類題和歌集

山里は淋しけれども鹿の音を居なからさくぞ人に増れる

此哥によりて組侍る。

為義

- 一 一炷開也。
- 一 十炷香札を用ゆ。
- 一 東山方五人、西山方五人と分つ東山方。上座也。「数四四ウ」
- 一 一二三の香、各三包充、客香一包、都合十包出香とす。

一 地香外に拵へ試に出す。

一 盤は豎溝一筋、横界廿間、其中に勝負の場、山の銚有。双方に楓を立る。

一 立物

鹿 二疋牝 紅葉大木二本一本は山の上に立る。 数四五オ

小紅葉数本盤に一面に立るべし。 幕拾張

春日山作物勝負の場に置、紅葉の本、見合立おくべし。

短冊縦二寸五分、幅五分 壹枚春日山の内の大木、紅葉にかけ置く

山里の哥を認べし

一 證歌の下の句によりて聞中たるは鹿動かす、間違たる方の鹿を進む。春日山を越ると動さる方より山の楓に付たる短冊を取て、我方の紅葉の大木に懸る。」数四五ウもし又其後に向方勝たる時は、短冊を向方へ渡べし。

一 鹿は双方大木の下に置き、双方の間数を消合せて負たる方の鹿を其教程進すべし。假令東山方四人間、西山方二人間の時は、西山方二間進む。東山方は動かさず、向の鹿を此方に引寄て、鹿と鹿行合を限として香は残りても盤の勝負は終る也。もし又鹿互に行違たる時は、負たる方の鹿、盤の向端に至るを限と」数四六オすべし。

一 始に連中銘々よりウの札を壹枚取て、山上の小木の本に置き、聞中たるは動かさず、間違たる人の札を山より下に落し、

聞違たる度毎に跡へ一間充退へし札は、山より落したる後に聞中たり共、山へあし。ける事なし。聞中たる時は其所へ札を退すに置べ。十炷ともに皆中たる人の札は盤終る迄山を落す事なし。其時は褒美として其木の根に幕をうつべし。勝負定ても」数四六ウ負たる組の内にて皆中の人幕を打を一座の規模とすべし。

一 勝たる方の内にて間数多き人に記録を與ふべし。客独間四間、二人三間、三人より二間也。地香独間三間、二人二間、三人より一間充の例を以て負たる方の鹿をその間教程進む也。

一 香終りても鹿二疋互に山を越て勝負決せず、数四七オ持に成たる時は、一二三ウの内、火末を一炷密に包直し、連中へ名乗紙一枚充渡して、火末を炷出す。其間を記出させ、是にて勝負を極る。若又此一炷も双方同間数ならば、勝負は持と定むるべし。此一炷は記録に認るに及ばず。

一 記録は中り斗を記す。」数四七ウ

春日山香記

〔表〕 数四八オ

春日山香盤立物之圖

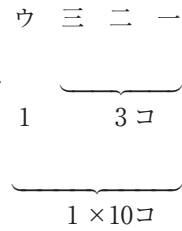
〔図〕 数四八ウ

〔図〕 数四九オ

〔図〕 数四九ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



本香^{*}には、地香^{*}「一」「二」「三」の香、各三包計九包と、客香一包の計十包を用いる。地香のみ試香^{*}を行う。盤物である。

盤は、堅溝一筋、横界二十間のものを用いる。中央には「勝負の場」を設ける。立物には、まず鹿を牡雌一つずつ用意する。また、「勝負の場」の中央には春日山の作り物を置き、紅葉の大木三本のうちの一本を山上に立て、左右に楓を立てる。残りの二本は、盤の前後に立てておく。さらに、小さな紅葉を数本、盤一面に立てる。他に、幕を十張り用意し、短冊一枚には、本伝書冒頭に記される「山里」の歌を書いて、春日山の紅葉の大木に掛けておく。

連中は東山方と西山方に五人ずつ分ける。東山方が上座である。答えには十炷香札を用い、一炷開きで香を聞く。香席の始めに、連中からひとり一枚ずつ「ウ^{*}」の札を取り、「勝負の場」の春日山の山上の小木のもとに置く。そして、聞き当てた人の札は動かさず、聞き違えた人の札を山から下に落として、聞き

違えるたびに一間ずつ退く。札を山から落とした後に香を聞き当てても、山に上げることはせず、札はそのままの場所に置いておく。十炷すべてを聞き当てた人の札は、盤の勝負が終わるまで山から落とさず、褒美として、その木の根元に幕を立てる。勝負が定まり、負けた方の組にすべて聞き当てた人がいたときでも、幕はその組の連中全員の分を立てるようにする。

これと並行して、東山方と西山方の勝負を行う。鹿を双方、盤の前後に立てた大木の下に置く。そして、東山方と西山方、それぞれに聞き当てた香の間数を換算・合計して、負けた方の鹿をその間数分進める。客香の独り聞きは四間、二人では三間、三人以上は二間、地香の独り聞きは三間、二人では二間、三人以上は一間である。そうすると、たとえば、地香を東山方が四人聞き当て、西山方が二人聞き当てた時は、東山方の鹿はそのまま動かさず、西山方が鹿を二間進める。

鹿が「勝負の場」の春日山を越えようと、鹿を動かさなかった方が、春日山の紅葉の大木に掛けておいた「山里」の歌の短冊を、自分の方の紅葉の大木に掛ける。もしまたその後には相手方が勝ったときは、短冊を相手方に渡す。盤上で鹿と鹿とが出会うと、香は残っていても、勝負は終了となる。また、鹿が行き違ったときは、負けた方の鹿が盤の向こうの端に至った時点で香席は終わりである。

なお、香が終わっても鹿がともに山を越えることなく勝負が決まらず、「持」（引き分け）になったときは、「一」「二」「三」「ウ」の香の火末（焚き殻）を一炷、任意に選んで包み直し、連中には名乗紙を一枚ずつ渡して、火末を焚き、その答えにより勝負を決する。もしまたこの一炷も双方が同じ聞き数ならば、勝負は「持」と定める。この一炷は、記録に記す必要はない。

記録は、聞き当てた香のみを記す。勝った方の連中で、最も多く香を聞き当てた人に記録を与える。

(2) 和歌作品との関わり

冒頭に挙げられている歌は、『類題和歌集』巻第十一秋部二、一〇九〇〇番に載る（本文の引用は、研究叢書413『類題和歌集』（日下幸男編、和泉書院、二〇一〇年十二月）に拠る）。

山近聞鹿声

為義

山里はさひしけれども鹿のねをみながら聞そ人にまされる
本組香は、この歌の下句にちなみ、香を聞き当てた方の鹿を動かさず、相手方の鹿を進めるという趣向になっている。

なお、この歌は、『和歌一字抄』上、一〇五番に、「橘為義朝臣」の歌として収められる。『和歌一字抄』は、藤原清輔の歌字

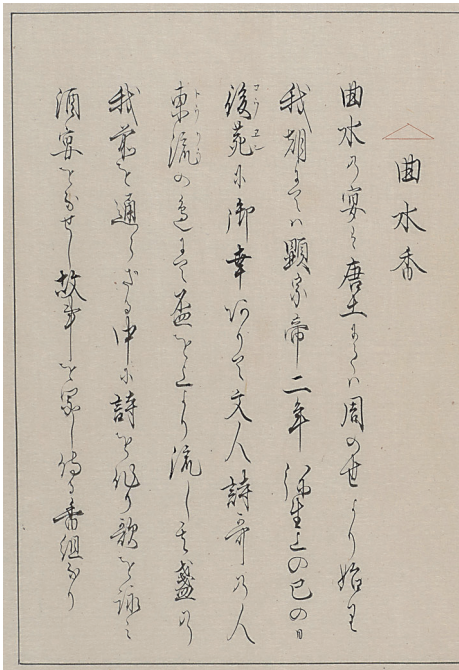
書で、「原撰本の成立は、作者表記に依りほぼ仁平年間（一一五一～五四）であると見られ、「作歌手引書として編纂された」という（『新編国歌大観』「和歌一字抄解題」（井上宗雄氏・西村加代子氏））。

橘為義は、『後拾遺集』初出の勅撰歌人である。『後拾遺集』に二首、『詞花集』に一首（同歌は『金葉集』三奏本にも）、『続古今集』に一首と、入集歌数は決して多くはないが、道長家の家司で、長保三年（一〇〇一）の東三条院四十賀屏風歌を詠進し、また、同五年の『左大臣家歌合』に出詠するなど、当時の和歌活動の一端を担っていたことが知られる。

附記

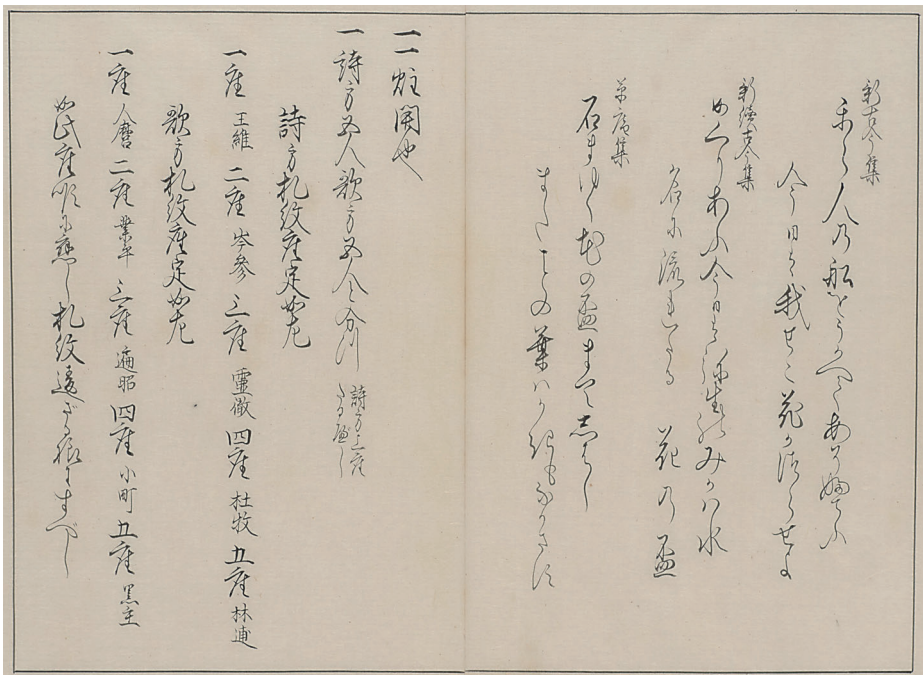
本稿は、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」（同志社大学人文科学研究第20期研究会第3研究（二〇一九～二〇二一年度）、および「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究（科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号16K00469、二〇一六～二〇一九年度）における研究の一部である。

【影印】 綴じ糸を外し、袋綴じを一丁ずつ開いて撮影したもの。



(数・一六丁裏)

(数・一七丁表)



(数・一七丁裏)

(数・四五丁表)

一二三の番各之色光管番一色部(合十色)
 出香とび
 一 地香外も撥(試)小出び
 一 盤と堅海一節横界廿間(中)小指負の湯山の
 傍も双り小楓と云。
 一 立物
 一 麻二疋 牝牝 紅葉赤木牝
牝の葉後小三、
一疋山のよ小三。
 小紅葉教牝 牝一四小
三の巻一 幕拾張
 春日山他物 猪負の陽中画紅葉の
名も合三たて
 短冊 歴二十五分
簡五分 ち枝 喜山出内よ小
紅葉小け画く
 山里(字)と徳下
 一 籠敷の下の勺中より関中より麻動の関遠
 ちの方の鹿と追ひ其日山や城と動ふる方より山の
 根小付も短冊と云く我々の紅葉を今小短冊。

(数・四五丁裏)

(数・四六丁表)

り又其後小向方指ふる時短冊(向)方(後)下
 一 麻二疋大木のり小画と双りの身枝(清)合と
 負ふる方の麻と其枝(後)進下(帳)合(木)中(四)人
 関(西)山(二)人(國)の時(西)山(二)間(進)む(木)山(一)動
 び(向)の鹿と(は)小(小)赤く(麻)と(麻)必(合)と(限)と
 香も(縛)つても(盤)の(猪)負(の)後(も)也(り)又(麻)半(小)仍
 遠より(付)負ふる(方)の(麻)盤(の)向(湯)小(仍)と(限)と
 下
 一 始(小)連(中)流(り)ウ(の)札(と)ち(枝)を(山)の(小)木(の)
 ち(小)画(と)関(中)より(動)ふる(遠)る(人)札(と)山(り)
 ち(小)画(と)関(遠)る(方)木(海)二(間)先(退)る(中)ち(小)画(と)
 関(中)より(付)負(る)札(と)遠(る)小(画)十(帳)も(小)路(中)より(人)の
 札(と)盤(流)る(と)山(の)後(も)也(り)其(時)の(鹿)必(合)と
 と(其)木(の)根(小)幕(と)山(下)猪(負)必(合)と

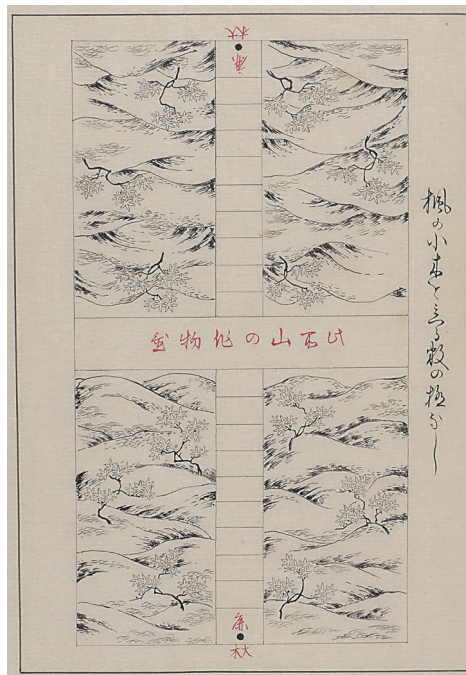
(数・四六丁裏)



(数・四九丁表)



(数・四八丁裏)



(数・四九丁裏)